

不登校生徒のためのグループ・アプローチ ——第2報 1995年・ある事例の記録——

池田 豊應

I. はじめに

昨年の「第1報」(池田ほか, 1996)につづいて、本報告では1995年度のわれわれの臨床実践「ヨコ体験グループ」のまとめを行っておくことにしたい。本年度も活動の基本的な考え方や進め方、プログラムの内容等の「形式」や枠組みは、第1報で報告したものとほとんど違いはないので、それらの事からについては省略し、本報告では、ある参加メンバーに焦点をあてて、彼女の本年度の歩みを追跡することで、副次的にこの実践にかかわる諸問題が浮彫りにされるような仕方で述べていくことにしたいと思う。

本報告の目的は、本年度のわれわれの実践をふりかえり、その経験や反省を言語化することにより、次の実践の質の向上を図ろうとすることにある。

ここで述べるような「事例研究」的検討は、本報告で取りあげた1事例に限らず、参加した16名すべてのメンバーに関して、毎週のケース会議において行われた。また、この臨床実践は学生に対しては「教育」であるが、学生にとってここでの体験は、その人間的成長に寄与するものとして、ときにむしろ治療的でさえありうると思う(池田, 1993)。それゆえ、本年度における活動の全成果というときには、これらメンバーと学生スタッフ全員の体験を、事例研究的に総括し総合することが

できれば、それによって全貌が明らかになりうるものである。しかし、もとよりそれを本稿で実現することは不可能であるから、ここでは膨大な観察記録と会議記録の山のような資料の中から、限定された事実を抽出し、それに基づいて、全体像が推察されるように記述することで満足しなければならない。

ここでの事例の提起に当たって、事例の匿名性を保護するため、いろいろな意味で事実が実際とは変えられている。この点で本稿は、事実にもっとも忠実な記録というよりは、より問題の本質に迫れるよう「構成された」記録である。しかし、問題を人間学的、心理療法論的に検討しようとする場合、特定の具体的な事実性が重要であることも多いので、どうしても変更できないことや完全に捨象できないことも少なくない。そこで、読者には個人の尊重のため、本稿が本来の必要以上に衆目に晒されることのないよう、十分にご留意下さるようお願いする次第である。

II. 95年度「ヨコ体験グループ」活動の概要

本年度の「ヨコ体験グループ」は、東海女子大学心理教育相談室の臨床活動となり、参加する学生スタッフは心理教育相談室「研修員」に位置づけられた。4月はじめに参加を希望する学生が募集され、所信表明と面接によって、研究生3名、4年生4名、3年生13名、計20名が研修員に認められた。研修する

側は、教職員3名（池田、生田心理教育相談室長、山下心理教育相談室職員）であった。このほかに、夏期合宿のみに限って他大学の男子大学院生2名に特別参加を依頼した。

以上のスタッフにより5月早々から、「研修員会議」が毎週木曜日の授業後4時半より開かれ、96年度末まで継続された。内容は、不登校生徒の理解やカウンセリング、集団心理療法等々に関する学習会と参加メンバーについてのケース検討会であった。この毎週の研修員会議のほかに、6月半ばには一泊のスタッフ研修合宿、7月中および8月後半の毎土曜日に、参加ケースの事前面接と合宿のための準備会が行われた。

表1に参加したメンバーの愛称、学年と性別を示す。

1. 夕子	浪人	女子
2. ちえちゃん	高2	女子
3. くらげ	高2	女子
4. さつき	高2	女子
5. さとちゃん	高1	女子
6. ブロッキー	中3	男子
7. ヤキソバン	中3	男子
8. ロッキー	中3	女子
9. ムーン	中3	女子
10. カンナ	中3	女子
11. かなちゃん	中3	女子
12. ちーちゃん	中3	女子
13. かほちゃん	中3	女子
14. もとえ	中3	女子
15. かりちゃん	中3	女子
16. ウラヌス	中2	女子

表1 参加メンバー

主要なグループ活動は、表2の通りであった。

	月 日	内 容	場 所
1. 7月定例会	7月29日(土)	出会いのゲーム	大 学
2. 夏期合宿	8月27日～30日	合 宿	岐阜県揖斐郡藤橋村星の家
3. 9月定例会	9月17日(日)	再会ミーティング	大 学
4. 10月定例会	10月29日(日)	遊 園 地	犬山・日本モンキーパーク
5. 11月定例会	11月23日(休)	運 動 会	大学体育館
6. 12月定例会	12月23日(日)	クリスマス会	大 学
7. 1月定例会	1月21日(日)	色々鍋パーティ	大 学
8. 2月定例会	2月11日(日)	山 登 り	金華山・岐阜公園
9. 春季合宿	3月23日、24日	合 宿	高山・国民宿舎

表2 主なグループ活動

III. 事例の記録

事例：夕子（19歳の女子、予備校生）

1. 家族歴

父親（51歳）は普段はおとなしいが、酒が入るとわけが分からなくなり、暴力をふるう。夕子が小学生の頃、母親の首を絞めたこともあったが、最近に夕子の首を絞めたこともある。その時、彼女は殺される覚悟をしたという。このことから夕子は家出をし、帰ったときに過換気発作で倒れたのを、父親は自分が首を絞めたせいと思い、警察に電話し、大騒ぎになった。

この父親自身、学生の頃「不登校」だったという。外ヅラがよく、その分、家で発散している。家での存在感はうすい。

母親（50歳）はプライドの高い、厳しい人。感情を顔にあらわさない。喘息持ちで体が弱い。家事はほとんどしない。夕子の担当カウンセラーによれば、この人は「アダルト・チャイルド」である。彼女はせっかちで、万事、超スローペースの夕子にいらいらする。夕子とは物差しが違う、別の世界に住んでいるという。ヨコ体験グループに対してはあまりよい感情を持っていない。「完璧な人」なので、夕子にとってこの母は絶対的で、尊敬しているが、母親は自分のことをわかってきていないという。「男というものは、いかに邪悪な存在であるか」という考え方を夕子に受けつけている。

兄（21歳、大学3年生）は、自分は自分という考えで、一人でやっていっている。夕子を馬鹿にしており、仲は良くない。

妹（16歳、高校2年生）は、成績がよくスポーツも万能、外向的で要領よいので皆にかわいがれていたが、今年のヨコ体験グループ合宿直前の8月上旬に、学校での事故で死亡した。

これまで家族関係の不和に関して、この妹が緊張解消の役割を演じてきた。夕子も自分の気持ちを代弁してくれる妹を頼りにしていたので、戸惑いは大きかった。妹の死後、父が夕子に急接近している。父と話すと、母親が焼き餅を焼いてそばを向き、母親と話すと父親が睨みつけるので、夕子はどうしたらいいかわからない。

2. これまでの経過

よくできる兄と妹にはさまれて、テンポがまるで違う夕子は、周囲から理解されていないという感じが強く、また劣等感を持っていた。小学校低学年のとき以来、時々いじめられた。小学4年生頃、給食のときにいじめられたことが原因で、人前で食事をするのが非常に苦痛となった。小学6年生のときには、いじめられたことで登校をしづりがちとなり、中学2年の頃から無気力、対人恐怖になって、まったく登校しなくなった。

高校1年のときにI病院を受診、以来、そこでカウンセリングを受けていたが、高校3年時に担当の女性カウンセラーが転勤したため、女性のカウンセラーを求めてK病院に転院、女性カウンセラーM先生のカウンセリングを受ける。現在継続中。睡眠薬と軽い精神安定剤を服薬。そのほかにもいろいろな薬を常用している。アルコールに依存したい気持ちもあるが、飲酒は抑えている。

ヨコ体験グループには、昨年（初年度）より参加。昨年の夏期合宿のあと、2学期から高校に復学し、無事卒業できた。定例会にも休まず参加した。

今年4月からは、大学進学を目指して予備

校に通いだしたが、今年もヨコ体験グループが継続されることを楽しみにしていたので、積極的に参加してきた。

3. グループ活動での動きと個人面接の記録 8月27日～30日 [夏期合宿]

ほかのメンバーが派手な動きをした陰に隠れて、夕子は表だってはそれほど目立つことはなかった。しかし、妹の死亡の直後で、内面的には相当混乱していて、彼女の調子はよくなかった。人を避けてひとりでいたり、皆が笑ってても笑わなかったり、憂鬱そうにポーズと外を眺めて、心ここにあらずといった状態で、決められた役割の仕事もできなかった。スタッフも、夕子が人と交わらず、自分の世界に入ってしまったたり、話しかけられても反応しないことに対して、どうしていいかわからず、敬遠したり、腫れ物に触るようにしていることが多かった。主に昨年一緒だったスタッフが、いれかわり夕子にかかわっていったが、同じ不登校の仲間とのかかわりはほとんどなかった。

しかし、次第に元気になり、今年は川で泳がないといていたのが、楽しそうに水に入って遊んだり、「肝試し」ではリーダーシップを取るようになった。3日目の夜、彼女はゆっくり話がしたいといて悩みを打ち明け、スタッフの麗子とLeeにはじめて妹のことを話した。最後の日、合宿の4日間をふりかえる作文は書けなかった。

9月17日 [再開ミーティング]

この日は台風に見舞われていたが、夕子を含めた10人のメンバーと13人のスタッフが集まった。そこでは合宿のときの写真を見たり、思い出を話し合ったり、グループでコラージュ作品を作ったりしたが、夕子はまったく孤立し、スタッフからの働きかけがなされたのみであった。放っておくと寝てしまったりするので、コラージュの時などはスタッフが強く誘って、ようやく参加させたのだった。

10月29日 [10月定例会、遊園地]

この日もあいにく小雨だったが、夕子は遊園地が好きなのでニコニコとしていた。妹のジャンパーを着て、妹の傘を持ってきており、しきりにそのことをスタッフに話した。

3時のおやつの頃から、夕子は皆からはずれ出した。ひとりで傘もささず、雨に当たっていた。麗子がフォローして、傘をさしかけると、夕子は「雨に濡れるのが好き、濡れていたい」といった。誰が来てくれるのかと試しているようでもあった。

遊園地での会が終わって皆帰ったあと、夕子は駅のホームに座り込んでしまって、帰らなかった。帰り道が同じスタッフのチャーイがそれに気づいて、2時間近くベンチに座って話を聞いたが、「どうしても帰りたくない」ということで切りがなかった。どうにもしようがなくなったために、彼女は電話ですでに帰宅していた相談室職員のスタッフ、Lee に応援を求め、彼女も加わって3人でファミリー・レストランに入り、それから延々と数時間、夜中の1時まで話し合ったのだった。翌日も相談室で話を聞くからということでもうやく納得したので、母親に連絡し、迎えに来てもらった。その母親の言葉には「こんな遅くまで子どもを引っ張り回している非常識なスタッフには、人の相談にのる資格はない」という非難も含まれていた。

11月2日 [ケース会議]

夕子の問題がこの日の中心テーマであった。まずチャーイは、「はじめは話をするつもりはなかったが、夕子が重要な話をし出したので驚いてしまい、あとは完全に夕子のペースに乗せられた。スタッフの責任と思って付き合ったが、その後『陰性逆転移』が起こってしまった。夕子独特の論理で、仮定法による質問が多くて、困らされ巻き込まれて、適切な判断ができなかった」と述べた。

そのときの夕子の話の内容は、次のようなことだった。

「このグループが今の心の支え。グループが

楽しかったから家に帰りたくない。グループと現実のギャップが辛い。今は何もしたくない。1日1食で、あとは寝ている。去年の合宿から前向きに考えて行動できるようになり、自分でもよくなったと思っていたけど、妹が死んでから駄目になった。家の中で理解者は妹だけだった。妹のような、いるだけで安心できて、何でも話せる、すべてを理解してくれる友人がほしい。

父親は妹の事故に関係して許せないことをしている。そのことで自分が爆発しそうで怖い。母親は父親のしていることを知らない。知っているかもしれないが、顔に出さないし何もいわない。以前、爆発して父と喧嘩したことがあるけど、そのしっぺ返しを母が受けたから、母はもう二度としないという。だからできない。でも今回ばかりは切れそう。だから帰れない。野宿をする。家に帰っても、いるところはないから辛い。やだ。帰りたくない」

ケース会議ではこのあと、夕子の帰りたくない話が8時間も9時間にも長引いたのは、スタッフの対応が問題解決を焦って、次々にいろいろな提案をしたからではなかったか、せっかく一生懸命付き合ったのに、反動で陰性の感情になってしまうのは惜しい、やはり枠組をしっかりさせて、その中で陽性の気持ちを持ち続けることが大事、夕子はサディスティックないい方をする人が多いが、それにマゾヒスティックに対応しないほうがよい、母親のみならず夕子もまた「アダルト・チャイルド」であろう、妹もまたそうだ等々、のコメントがなされた。

そして、次のような方針が決定された。①グループの主催者側の責任は、その都度の「集合」時から「解散」時までとし、この旨はすべてのメンバーの家庭に手紙で連絡する。②夕子については、グループだけではなく、個人的なケアを必要としている。夕子はその面接者にスタッフの麗子を、「妹のように話を聞いてくれそうだから」という理由で希望していたし、麗子も担当を望んだため、麗子によ

る個別面接を導入する。

この個別面接導入の目的は第一に、グループ活動の中では收拾しきれないメンバーの内的問題への対応であり、もうひとつは、スタッフの臨床経験、カウンセリング訓練、であった。つまり、面接はあくまでもグループ・アプローチに付帯した補完的活動であって、本来の治療責任者はK病院の担当カウンセラー、M先生に変わりはないということであり、夕子をグループに託されている範囲内で、研修生の臨床的訓練の機会とし、この責任は池田が負うということである。それゆえ、面接経過は毎週のケース会議で概要を報告し、池田のスーパーヴィジョンを受けることが義務づけられた。

11月8日 [麗子との初回個別面接]

この日、夕子は予定の時間よりも早めにやってきた。麗子は自分の緊張を気づかれないよう明るく振舞い、週一回一時間などの面接契約をしようとしたが、「私はまだ麗子さんと会うことに決めたわけではない」というので、麗子はショックを受けた。夕子は自発的に10月の定例会後に家に帰ろうとしなかったことについて話した。夕子が麗子に頼ろうとしている感じが伝わってきて、麗子は悪い気はしなかった。

面接が終了しても、夕子は気分が悪いなどといって、なかなか帰ろうとしないため、結局、麗子は大学の玄関まで送っていくことにした。麗子はどうすればいいかわからず、おろおろする自分の拙さに、先のことが不安になった。

スーパーヴィジョンの要点：そう不安にならなくても、気楽に自然にいけばよい。失敗から学ぼうとする姿勢さえあれば、失敗自体を恐れる必要はない。時間枠は必ずきちんと守るよう、毅然とした対応が必要。カウンセラー役割としては毎回、一定の同じ雰囲気を保つこと。終了後、玄関まで送っていかないこと。

11月15日 [第2回面接]

夕子は「早く来すぎた」といって、窓の外を眺めて待っていた。にこやかで落ち着いていた。

「10月の定例会で事件を起こしてから、M先生とも話しやすくなったし、勉強する気もわいてきた。でもまだ完全ではなく、少し落ち着いてきている段階」

麗子にとって、終始、夕子がにこやかだったことは嬉しかった。夕子は母親と喧嘩をしたこと、予備校のこと、M先生との面接のこと、小学校のときにいじめられたこと、去年のグループのことなどについて話した。自分のことをわかってほしいという思いが麗子に伝わった。

麗子が前回の面接契約の件に触れると、夕子は「前回の自分は変だった。あれは取り消してほしい」といい、「麗子さんと週に一回、定期的に会うことで人と話す訓練がしたい。自分の思っていることを話すと、すっきりする。自分の感情を表現することが下手だから、徐々に慣れていきたい」と語り、麗子にいろいろな点で憧れを感じると述べた。

麗子は夕子がにこやかだったことは嬉しかったが、次回は暗くなるのではないかと、今は無理しているのではないかと、逆に不安も感じた。

スーパーヴィジョンの要点：夕子のいう「訓練」に引っ張られないように注意すること。面接は人間関係を深める中で、もっとも重要な問題を正面から語り合うことが目的。その際「共感」は勿論、基本だが、相手の感情を受け止めるということと、自分も一緒になって一喜一憂することとは違う。どうして次は暗くなると思うのだろうか。

11月22日 [第3回面接]

この日もやはり夕子は大幅早めに来た。前回と同様、にこやかだったので、麗子はほっとした。

「最近不安定だし、疲れているなあと思ったら、生理になった。最近よく嫌な夢を見る。

夢と現実の区別はつく。以前、父と母が離婚する夢を見た。恐くて今でも覚えている。実際に私が小学生の頃に離婚しそうだった。その頃は妹もいたので感情を出すことができた。妹は亡くなったけど、亡くなったという気がしない。最近、納骨が終わり、少しだけもういないんだと思えるようになった。妹が生きていて、自分が死んでいる夢を見る。人前では表情を作っているので疲れる。家では一層、気を使う」など、相変わらずゆっくりした口調で語った。

麗子が、ここでは何も気を使わなくていいという、夕子は「私は本気で全部を出すと凄いことになるから……。でもそのうちにどんどん出てくると思うけど」と、麗子を試すような返答をした。夕子との面接はかなり沈黙も多かったが、麗子は十分沈黙に慣れてきていた。

スーパーヴィジョンの要点：それは確かに「自分をどこまで受け入れてくれるのか」ということ、それが出せるだけ関係が深まりはじめています。

11月23日 [11月定例会、運動会]

この日、夕子ははじめは「最近、疲れている。運動はやらない。寝てる」といっていたのが、何度か誘われると、バスケット・ボールに加わった。次第に張りきり出し、ついにフルセットを頑張り通して、ものすごい元気さを見せた。いろいろな競技で同じグループになって、メンバー同士の交流も出てきた。

その後、疲れたとあって寝転び、「無理して気分が悪くなった。こうなることはわかっていました。はしゃぎすぎた自分が情けない」という。疲れや機嫌の悪さを自分で処理できず、自己を統制できない。体調の悪さを訴え、周囲に依存しようとする。スタッフがおろおろすると、そんなことばかりしようとするので、麗子は「そこで寝たら、風邪引くよ」「誰だって頑張れば疲れるよ」などとあえて指導的に対応した。

会が終了した後、夕子は「帰れないかもし

れない」といい出した。そのことに麗子は「だから特別の場を設けているのに、どうして相変わらずなのか」とイライラした。結局この日は、麗子を含めた4人がスタッフの車で夕子を自宅まで送り届けた。次のケース会議では、このことを疑問視するスタッフもいた。

11月29日 [第4回面接]

「定例会で皆から離れて、ひとりになったのは、一呼吸おきたかったから。スタッフが心配して見に来てくれるのは嬉しかった。無理すれば、ひとりでも家まで帰ることはできたけど、皆が送ってくれて嬉しかった。スタッフには甘えているところがある」

そのほかに、麗子が夢に出てきたこと、最近過食気味だということ、人前で食べるのが苦手だということ、これから食べられるようになれば、自分は変わるんじゃないかと思っていることなどが話題になった。

今回の面接でも夕子は終始にこやかだった。麗子にはだんだん夕子が取る行動とその意味とが結びついてきたが、現在の関係が表面的なものか、深まってきているのかはよくわからなかった。

スーパーヴィジョンの要点：問題行動が出てくるということは、夕子の中にグループに対する信頼感や自分が受け入れられているという感じがあるからこそ、なのである。定例会後の状況では、ああして送ったのはやむをえない。それは枠組を破っているが、原則は十分わかった上で、柔軟に対応することが大事。ただ「どうして彼女は送らせたのだろう」ということは考えなくてはいけないし、また個別面接でも「なぜ帰れなくなってしまうんだろう」と話題にしていかなければならない。面接はうまくいっている、この調子でよい。

12月6日 [第5回面接]

はじめはけだるそうにしていたが、話をしていると笑顔は見せる。しかし、前回までのようにすごくにこやかというのではない。話題は定例会で夕子が不安定になることに向け

られた。夕子自身そのことについて考えていて、「ひとりでどこかへ行ったり、帰りたくなくなったりするのは、多分誰かにわかってほしいからだと思う。今まではヨコ体験グループのスタッフのように、自分のことをわかってくれる人がいなかったから、そんなことはしなかったけど……。誰にも気づかれなかったときには、自分でどうにか立ち直れるように、ある程度の余力は残している」と語った。また、メンバーのKちゃんから電話があったことを嬉しそうに話した。

12月11日 [第6回面接]

「来年の3月以降、この面接がどうなるのか不安。ずっと面接を続けたいけど、できなさそうだから、落ち着かない。ボーッとして、そのことばかり考えてしまう。不安は先のこと集中してしまう」

面接はグループが終了する3月末までの約束だった。麗子は夕子が先のことばかり考えてしまうのは、自分の不安や焦りが夕子に反映しているからだろうかと思った。第4回面接くらいから、よく夕子が「話したいと思っていたことを忘れてしまって、話せていない」といっていたが、それは夕子の麗子に対する不満さの表現ではないかとも思う。

スーパーヴィジョンの要点：彼女はいろいろと人の気を引くようなことをいう。あるいは彼女自身のことなのに、それが相手のせいであるかのように思わせてしまうところがある。遊園地から帰れなかったときなどによくみられた彼女独特の論理は、いわゆる「偽りの(歪んだ)コミュニケーション」(木戸、1982)であって、これはおそらく彼女自身が母親から受けてきたものと思われるが、たとえば、前回の「スタッフは自分のことをよくわかってくれる(1)」といういい方も、「スタッフなら、わかってくれるはず(2)」「だから、もっとわかるべき(3)」「わからないのは、あなたが悪い(4)」という意味になり、治療者としてはもっと一生懸命、完全に彼女のためにならなければならないという罠に引きずりこまれやすい。

陽性の感情を持ち続けることは大事だが、いわゆる「陽性逆転移」への誘惑には要注意である。そのときの応答としては、(2)~(4)以降の議論に引っ張られないようにして、むしろ(1)を確認することに留まり、夕子が素直にそのことを味わい、喜べるようにすること。

12月7日 [12月定例会、クリスマス会]

夕子はこの回の企画、準備、進行の担当だった。彼女は会場に1時間前から来て、張り切って飾り付けをした。自分が提案したゲームの司会をし、楽しそうな笑顔を見せた。ほかのメンバーとの交流も出てきた。しかし、ケーキを作って食べる時には、席に着かずうろうろしたり、寝そべったりしていた。スタッフの「おにい」が「眠いの？ 何で起きないの」と話しかけると、一旦は起きるが、またすぐに同じようにした。麗子は頑張っている夕子を応援する気持ちでずっと見ていた。知らないうちに夕子を目で追っている自分がいた。

夕子はこの日、素直に帰っていった。以前のような逸脱行動もなく、はしゃぎ過ぎることもなく、彼女なりのペースができてきたようだった。

12月22日 [第7回面接]

「お腹がすいているのに食べることができなかったのは、やはり人前だったから。寝ころんでいたのも、食べられないのをごまかしていた。1月の定例会も鍋大会だから、出たくない」とまず定例会のことが話題になった。

そのあと、麗子のいった何かのことについて、「今の麗子さんの言葉に怒りを感じた。麗子さんには感情を徐々に出していけるかもしれない」と述べた。「私は今まで怒りや悲しみを抑え込んできたから、どのように出せばいいかわからない。電機製品についている説明書のようなものがないと、できない。今日、面接に来るのがはじめて面倒くさいと思った。今までは来たくて来ていた。この面接には今まで大きな期待があったが、今はない。でも

そのほうがかえって自然に振るまえる」

スーパーヴィジョンの要点：彼女は実際には相当攻撃的な言葉を出すことが多いのに、自分では感情が出せているとは思っていなかった。その部分が解離しているわけだが、麗子の受け入れる姿勢に安全性を感じて、次第に自分の感情を自覚できるようになってきた。この点では面接はうまくいっている。しかし、感情はそのまま出せば、それでいいというものではない。たとえば麗子を傷つけるようなことをいっても、平気で全然気づいていない。治療者的な態度としては、そこに気づかせるためにはどうしたらいいだろう。

1月8日 [第8回面接]

夕子のほうからどんどん話題を出し、またいつもよりひとくぎりの会話が長かった。話したいことがたくさんあって、それを一気に吐き出しているように見えた。動物が好きだということ、予備校の模試が気が重い、母親は勉強がすごくできる話、母親は夕子の高校の先生から母親としての態度を非難されて、夕子に当たったという話、「個性」の話等々であった。夕子は個性的といわれるのは嫌だといいいながら、嬉しそうに見えた。

1月17日 [第9回面接]

前回の個性について夕子は考え続けていて、M先生との面接でも話題にしていた。

「個性的といわれるのが嫌なのは、自分では普通だと思っているから。M先生に私の個人的なところを詳しくいってもらって、そういう自分の個性が結構好きだということに気づいた。今までは自分の悪い面しか見られなかったけど、プラスに考えることができるようになってきた。最近悪いところを指摘されたら、直すように努力している」

夕子が麗子をこの面接の担当者を選んだのは、夏の合宿のとき、川で麗子が触ったり抱きしめたりしても嫌な感じがしなかったからという。このあと麗子は動作法の「肩の一点弛緩」を行った。夕子は「人にいえないよう

な、自分にとってはまだ早い恋愛関係のような夢」を見たと言った。

スーパーヴィジョンの要点：夕子はかなり素直になってきている。また、その内奥から、何か温かいものが湧き出してきているようだ。期せずして行った動作法は「呼吸同時」、「あうん」の呼吸のようなものかもしれない。

1月21日 [1月定例会、鍋大会]

夕子は、妹が納骨された母親の実家のお墓に、前日から泊りがけで母親と一緒に出かけでお墓参りをし、その日、朝一番で定例会の会場に直行してきたが、元気だった。いつもと違って洒落た服装で、母親から「外出するときくらい、ちゃんとした格好をきなさい」といわれて、仕方なく着てきたという。

小グループに別れていろいろな鍋料理をつくったが、夕子は自発的にお餅を持参してきていて、それをめぐる話題が展開していた。

そのあとの全体での「話し合い」では、中3の4人のメンバーが積極的に学校のことや親のことについて話した。夕子はまだ皆の前で自分のことを語ることは抵抗があり、居心地悪そうにしていたが、両親のことについては自分の問題と重ねて感じ入っているようだった。

しかし、その後、夕子のイライラはつのっていった。隣にいたナガと卯月が夕子を誘って、3人は全体グループから抜け出した。いわゆる「裏グループ」である。

1月24日 [第10回面接]

「鍋大会では結構食べられた。だけど、話し合いのときには、誰かを殴りたくなった。その雰囲気をつぶ壊したかったからかもしれない。もともと話し合うのは嫌い」

殴ることに関連して「よく先生から叩かれたし、親に殴られたこともあるけど、殴られるほうがいい。殴られているときは被害者になれるから自分は何も罪を感じなくていいから」などと語った。M先生とのカウンセリングでも感情がやっとなおせるようになってきた。

身体も少し軽いという。「私たち似た者同士なのかもね」と彼女はよくいうが、久しぶりにそれを聞いた。

スーパーヴィジョンの要点：今後の課題は別れの準備。つまり3月末で今期のヨコ体験グループが終了するのに合わせて、個人面接も区切りを付けなければならない。そろそろ夕子の中にこの終結に向けての心構えを作っていくこと。

2月2日 [第11回面接]

「最近、やる気が出ていて、予備校も楽しい。お風呂に長く入っていて、そこに誰かがいるような感じで、話しかけるようにして考えごとをしている。それが麗子さんであることも多い。前よりすんなりと考えることができるようになった。表情が豊かになったのは、感情が出せるようになったから。鍋大会の話し合いのときも池田先生に腹が立ったが、それは先生自身に対して怒ったというより、話し合いに持っていった先生の雰囲気、父親の態度を重ね合わせて怒りを感じたのだと思う。父親というのは、たとえば父親と喧嘩すると、家にお金を入れてくれなくなるから、あまり怒らせないようにと母親に頼まれていたり、遅く帰ってきてわざと家族と顔を合わせないようにしていたりして、嫌なイメージしかない。家では父親だけが一階に住んでいて、ほかの家族は二階に住んでいる」

スーパーヴィジョンの要点：この父親転移についての洞察は、おそらくM先生との面接で準備されたものであろうが、それにしても大したもの。何か動き出してきているようだ。

2月7日 [第12回面接]

「深いところまで考えながらここに来たので、疲れてしまった。深いところというのは、まだまとまらないので説明できない。最初は遊園地事件のことを考えていて、『最近、言葉が汚くなってきた』と思っていた。小学校1、2年の頃までは男の子たちとよく遊んでたか

ら、言葉も汚かった。その頃が一番自分らしい頃だった。汚い言葉が出てくるということは、その頃の自分が出てくるということだから、良いこと。遊園地事件やその前の夏合宿でLeeに話したいことを話してから汚くなった。その頃から少しずつ自分を出せるように成長してきたということだと思う」

スーパーヴィジョンの要点：彼女にとって、自分を出すということは「汚い」ものが出てくるということ。しかし、それが解離されたり投影されたりするのではなく、統合されて肯定的に受け止められている。

2月11日 [2月定例会、山登り]

朝早くから来て、今日はすごくハイだという。多くのスタッフに接し、よく笑い、「今日はすごく楽しみにしてたんだ」最近はいいほうに考えるようにしている。「昔の自分に戻りつつある」「前向きになってきた」と話した。

お昼、夕子は高2のさつきとスタッフの卯月と3人で一緒にお弁当を食べたが、このとき、ある話で共感し合い、3人は盛り上がった。

下山のとき、中3のヤキソバンが夕子に執拗に世話を焼いたのが、彼女にかつていじめられた経験を思い出させたのか、急に夕子は走りだし、卯月が追いかけて、このときは事なきを得たが、到着した下の公園で、夕子は突然いなくなってしまった。

公園での予定のプログラムは続行しながら、池田と数人のスタッフは必死で夕子を捜しまわった。しばらくして、トイレの裏で座り込んでいる夕子が発見された。そこで池田は責任者として夕子を叱ったが、夕子は素直に謝ることはなく、理屈にならない理由で反抗した。

2日後、夕子は池田に定例会で逸脱した行動を取ったり攻撃的になったことについて話したいから、面接の時間を取ってほしいと電話してきた。池田は時間の都合が合わないことと夕子の面接者をこれ以上増やさないほうがよいと考え、「そのことなら今度の春合宿の

ときにゆっくり聞こう」と答えた。

グループ代表としての池田の役割は、いわゆる「外枠」を固めることにあり（池田、1997）、その「護り」の中で、スタッフやメンバーは自由に心おきなく動くことができる。その外枠からはみ出るような動きに対しては、上に述べたように制裁を加えるが、それ以外の点ではできるだけニュートラルであるほうが、スタッフもメンバーも動きやすいであろう。それゆえ、池田としては特定のメンバーと特別、個人的に、あるいは心理療法的に、深く関与しないことにしている。もちろん、それは機能的な役割遂行の問題であって、われわれが基本的に「人間のかかわり」を重要な目標にしていること（池田、1995）とはまったく別次元の話であることはいまでもない。

2月16日 [第13回面接]

夕子は、池田に話したいといったのに断られたのがショックだといって、そのことばかりにこだわっている。また、卯月を振り回してしまっただけ、その誤解を解きたいので、彼女とも会ってちゃんと話がしたいという。

「池田先生に反抗できたことは、やらなくてはいけない課題だった。それができなければ自分は成長できない。だからこそ反抗したことをわかってほしい。そのことが気になっていて、ずっと暗かった。話をしないことには自分は成長できない。現在、たくさんの悩みや不安材料がある。一番早く悩みを解決できるのは、先生にちゃんと説明すること。なぜ先生は会ってくれないのか。合宿まで待つのは永すぎる。先生に悪気がないことはわかっているからこそ、どうにもならなくて辛い」

夕子は面接の時間が過ぎても、身体が動かないといって、動こうとせず、座ったままで無言の状態を続けた。急に机に突っ伏して「このまま死にたい」という。一時間ほどするとやっと立って歩けたので、「歩けるじゃない」と麗子がいうと、「もともと歩けなくなっているわけじゃない。結局逃げ出したんだよ」

と答える。麗子が玄関まで送っても、そこから動けない。仕方なく麗子が引きあげると、夕子はさっさと帰っていった。

スーパーヴィジョンの要点：夕子が池田や卯月と個人的に話したいということばかりいうので、麗子は「私はどうでもいいのか」といじけた気持ちになったという。夕子が麗子にそう感じさせる態度を取っていることを本人に気付かせるためには、麗子はどう対応したらよかっただろうか。そこでもし、麗子が率直にその気持ちを表明して、そのことのやりとりになっていたら、そのあと夕子は自己中心的な理屈を主張したり、ヒステリー的に悲劇のヒロインを演じるという展開にはならなかったかもしれない。だからカウンセラーが「受け止める」ということは、話を先に進めるよりも、クライアントをそこに留めたり、後ろに戻したりするということなのである。

2月21日 [第14回面接]

この回の夕子はいつもの調子に戻っていたので、麗子はほっとした。M先生との面接もあって、自分なりに整理がついたのか、もう前回のこだわりは示さなかった。

「山登りの前夜、母親と大学の進路について話したが、自分の希望と母の勧める学部はまったく違っているし、母親の勧める大学は難しすぎる。それで混乱し、眠れなかったから体がついていかなかった。池田先生に反抗的になったのは、先生を困らせて面と向かうことが、私の成長への課題として手っ取り早く、好都合だったから」

そのあと、面接の最終日の日取りが4月上旬に決められた。夕子が意外にあっさりと気持ちにけりをつけ、巣立っていこうとしていることに、麗子は驚きさえ感じた。

スーパーヴィジョンの要点：そうしてみると、前回のことは夕子が麗子との別れに備えて、別の対象を求めようとしていたということなのかもしれない。つまり、それだけ麗子との別れが実は辛いということ、しかし、夕

子はそれに立ち向かっていこうとしている。

3月6日 [第15回面接]

調子を訊ねられると、夕子は「疲れている」というが、これはその理由としての愚痴を訴えるための枕詞のようなものらしい。顔はにこやか。

麗子の都合で先回の面接から2週間の間があったが、「先週は本当なら会えるのにと思ったら憎らしくなって、今度会ったら殴ってやると思っていた。麗子さんなら殴っても許してくれそうだという安心感がある。今まで閉じ込めていた怒りの感情をストレートに表現できるようになってきた」という。しかし、穏やかではない極端な表現が多い。ほかの話題としては、「自分は運がいい。いろいろあったが、結局、最終的にはいい方向に向かっていく」「スタッフたちから自分が責め立てられる夢が、最近見た夢の中で一番嫌な夢だった」ということなど。

スーパーヴィジョンの要点：アグレッションによる愛情表現という夕子の基本パターンは同じだが、ニュアンスが違ってきて、麗子に向けられたそれには暖かさが感じられる。まだ直接的な愛着の表現は照れくさいのだろう。こうした感情が「別れ」への準備を契機として出てきているとすれば、「時間制限療法」でいう面接期間を限定することの効果が見られているともいえる。

夢ではアグレッションが相手に投映されて、自分が攻撃されるという形になっている。スタッフから責められているというのは、他者への関心が高まりつつあるからだともいえるし、他罰的な夕子が自分に批判を向けようとしているのかもしれない。

3月14日 [第16回面接]

「恋愛や結婚のことを意識しないわけではない。ずっと一緒にいてくれる人がいたらいいなあと思う。でも今は近くにその対象がいななし、余裕もない」と、今までにない話が出る。大学のことでようやく自分のやりた

いことに正直になれたという。

「麗子さんとは本当に似ているところが多い気がする」と嬉しそうに語る。麗子にも、夕子の表情が麗子に似てきたように思われた。

3月22日 [第17回面接]

翌日からの高山での最後の春合宿を、今まではすごく楽しみにしていたのに、急に行きたくなくなったという。その理由というのは、「池田先生と個人的に話す約束をしたし、卯月とも話しておきたいと思うが、どうしたら迷惑をかけないように、悩ませないようにいえるか、言葉を考えなくてはいけないので、疲れる。もうひとつは、高山には思い入れがあって、以前妹が行って買ってきてくれたお土産も残っている。だから行くと辛くなり、気持ちを抑えられなくなりそう。また迷惑をかけてはいけないとわかっている反面、暴れたいという気持ちもあって、このままで行くとか何かしそう」ということであった。

麗子は、この面接ももうすぐ終わると思うと、すごく寂しいと感じ、自分はだんだん夕子を好きになってきていることをはっきりと自覚した。

3月23日、24日 [春季合宿]

この春季合宿は年間活動の締めくくりの意味を持っている。つまり、グループはこれで解散となることによって、「終結」(完結)を迎える。プログラムの「卒業式」は、それを端的に象徴している。次年度の活動がどうなるかはわからない。これが大事なのである。死が生を照明する。あるいは、死が再生のはじめとなる。

この合宿で、夕子はもう池田には多くを語ろうとはしなかった。そのかわり、夕子は卯月を相手に徹夜で語り明かした。妹のこと、母親のこと、父親のこと、池田とのこと、まさにこの1年間のテーマを総括して、結末をつけたのである。こういうことができるのが合宿ならではの、のよさである。夏の合宿の意味が、火と水によるイニシエーションであっ

たとすれば、春の合宿では、異郷の「夜」が自己の統合というターミネーションを促す舞台となったのであった。

最後のプログラム「色紙交換」で池田への色紙に夕子が書いたのは、「先生と話をするといふ強がってしまい、結局、いいたいことの半分もいえませんでした。そんな私に文句もいわずにいてくれて、ありがとうございました。私ももっとがんばろうと思うので、先生もがんばってください。夕子」という言葉であった。

4月9日 [第18回面接]

最終回のこの日、会話はかなり意識的に面接の初回の頃からの振り返りとなった。

「麗子さんもはじめは緊張していたせいか、話が噛み合わなかった覚えがある。その頃は多分そのせいもあって、わかってくれているという感じがあまりなくて、欲求不満になっていた。今は話がしやすい」

この回の印象を麗子はカルテに、次のように記している。

「私も彼女も、最初に比べるといいたいことをお互いにいい合えている。約半年間の短い期間であったが、お互いの相手に対する興味とふたりの関係が本当に深まっていったことに、私は感動している。

これで私と定期的に会う機会が終わりになることに、彼女は多少の不安を感じているようだった。私もこれからの彼女のことは心配なので、何かあったら相談室に伝言してくれたら、私から電話をして会えるようにしたいといったが、心理療法のルール通り、私の電話番号は教えなかった。私自身は優柔不断な人間だと思っているが、この面接の終結を意外にさっぱりと済ますことができたことに、今驚いている」

IV. 考 察

1. グループ全体の展開過程

16名のメンバーのうち、12名が年間の活動

を通して参加した。スタッフは20名のうち、2名が途中から都合によりリタイアした。

グループ全体の間人関係をソシオメトリー風に図式化して検討してみると、本年度のグループ展開は、次のようにまとめることができる。

夏期合宿：心理的には、全体の親密感や凝集性はこの4日間でぐっと高まる。しかしまだ実質的にはメンバー同士はバラバラで、この間をスタッフの意識的努力が繋げている。夕子には主に昨年からのスタッフが働きかけた。

9月再会ミーティング：少しづつ、さまざまなかわりが出てくるが、まだ偶発的なものである。夕子はほかのメンバーからはまったく孤立。何人かのスタッフが接近。

10月定例会：2、3人のメンバーとそれにかかわるスタッフからなるいくつかの小グループができてくる。夕子は解散後、例の事件で Lee とチャーイ と関係。

11月定例会：上の小グループ化がよりはっきりしてくる。夕子のグループはだんだん大きくなっている。何人かのメンバーが夕子に接近。スタッフも会議で問題になったあとなので、皆かかわっていつている。とくに卯月と親密になっていく。

12月定例会：夕子を中心としてほとんど全体がひとつのまとまりになっている。夕子はこの回の係だったので、新たな多くの関係が成立した。麗子も夕子以外のメンバーとのかわりを拓けている。

1月定例会：同様に全体的なまとまりがある。その骨格になっているのはメンバー同士の繋がりであり、スタッフはそれにぶら下がる感じになっている。それまではスタッフが媒介役になったり、メンバーを取り囲んだりしていたのが、この頃になるとメンバーが主で、スタッフはその中に参加させてもらっている感じになった。「話し合い」では中学生メンバーが活発に自己開示して発言。夕子は「裏グループ」。

2月定例会：2月もまったく同様である。こ

のような展開の中では、スタッフも淘汰されていくことがわかる。つまり、メンバーと積極的に接しているスタッフはますます深い関係になり、そうでないスタッフは心理的にはみ出していく。

夕子は下山後、アクト・アウトした。しかし、そうした問題が会議の課題となり、むしろスタッフの凝集性を高めている。スタッフのスタンスの相違は明瞭になりながら、相互信頼関係が強まっている。

春季合宿：もはやメンバーとスタッフの区別もなく、人間としてはまったく対等に全員が「ヨコの関係」になっていった。スタッフの「皆をまとめなければ」とか「雰囲気をつくらなければ」といった役割意識はなくなり、一緒に遊び、語り明かすことができた。

以上要するに、ここにはわれわれの意図した「ヨコの広がり」が実現していく過程があったとあってよい。

2. 個人の内面的展開過程

上にまとめたグループ全体の、いわば外側から見た過程と関連して、個人のうちにも同様の実現過程があった。夕子においては、それは次のようにまとめることができる。

彼女は今年のグループで、かなりポジティブな経験をしたものと思われる。だからこそ夕子は、彼女にとって唯一の支えだった妹が亡くなった直後であったにもかかわらず、合宿に出、その後の年間活動にも積極的に参加した。なお、最初の7月の定例会に出席しなかったのは、この日は妹が事故によって入院した翌日であったからである。

この経過の中で、彼女が直面した心理的作業は、次のようであったと考えられる。

①妹の死に対するモーニング・ワーク（喪の仕事）の遂行。これが直接、精神的に悼み悲しむこととして引き受けられればよいのだが、夕子はまだそれができるまでには成熟していなかったために、激しい感情がさまざまな問題行動となって突出することに

なった。彼女にとってこの課題遂行のためには、以下のプロセスを辿らねばならなかったものと思われる。

- ②家庭内での役割変化（それまでは、妹が父親に異議申し立てをしたり、両親の不和の間に入って橋渡しをし、家庭内の緊張解消に役立つ働きをしていたのだが、妹の死後、この役割が、とくに父親から、夕子に期待されることになった）への対応
- ③この役割を引き受けるに当たって、夕子はまず父親への異議申し立てから始めようとした。それゆえ、彼女は父親をいっそう憎悪し、反発せねばならなかった。
- ④しかし、それは母親から強く禁止されていた。感情や汚いものは深く抑え込まなければならない。しかし、もう爆発したい。この葛藤から彼女は家に帰れなくなった。夕子の内的問題はグループでは対応しきれないので、個別面接が導入されることになった。
- ⑤夕子にとっては、③はどうしても「やらなくてはいけない課題だった。できなければ自分は成長できない」。
- ⑥そこで、その対象を父親からグループの代表者に置き換えて、反発した。彼ならばそれを受け入れてくれるであろうから、父親よりはやりやすい。一方で、次第に感情が湧いてくるようになる。
- ⑦夕子はそうせねばならなかった反抗の理由を説明する機会を求めた。この機会は更なる反抗と和解の実現可能性を持つものだった。ここで、ふたりの本格的な心理療法関係を構成して、この両可能性を実現させ、彼女の成長を促すこともありえたであろう。しかし、いくつかの理由から彼はそれをせず、個人面接および学生スタッフとの関係のうちに彼女をさし戻した。
- ⑧スタッフやメンバーとの関係が深まる中で、それに支えられて、彼女は間接的な形で父親に対する反抗と和解の経験をすることができた。それによって心理的に一ということとは当然、現実的にも一、父親との関係の

あり方が変化し、彼女が「成長できた」ことを意味していた。

- ⑨春合宿の中で夕子はスタッフを相手に徹夜で語り通した。それはこれまでの心理的作業を締めくくる総括であった。つまり上にあげた①から⑧の総ざらいであり、確認であった。これによって、本来の課題、妹の死に対するモーニング・ワーク、が遂行されたものとみなされうる。
- ⑩母親には、夕子はまだ取り込まれたままで、そこからの自立の課題はまったく手つかずである。これは今後の課題であるが、今回こうして、夕子の父親との心理的、現実的關係が変化したことにより、今後、家族関係も何らかの変容を遂げていくことになろうし、その中でやがていつかは母親との関係も変わっていかざるをえなくなるに違いない。

以上のような内的な歩みを進めるにあたって、夕子は「妹のように、何でも聞いてくれ、理解してくれる存在」としての面接者を望んだ。麗子がそうした「きょうだいのような存在」になりえたことは確かであった。スーパーヴァイザーとしての筆者が麗子に期待したのも、まさにそのような存在として「受容すること」の一点であった。こうして麗子は夕子との間に適切にポジティブな距離を保ちえた。この麗子との関係を基盤にして、夕子はグループの中でのヨコ関係を拡げていくことができた。これは麗子がはじめから意図したことであったが、麗子は個別面接で深くかかわる反面、グループでは一定の距離を置こうとした。これに夕子も応えて、グループではほかの親しくかかわる対象を求めていったのであった。個人と集団のいわゆる「コンバインドセラピー」(小谷、1990)においては、以上のような場面における使い分けが重要である。

なお、今回の個別面接は集団に収まりきらない問題をかかえたひとりだけであったが、今後の方向として、全メンバーに個別面接を導入していきたいと考えている。その理由に

ついては、笠原嘉(1977)による次の言葉によって代弁させておくことにしたい。「1対1の関係を醸成しない集団内関係は、いかにそれが濃密にみえても、……治療的効果を生まない。……できればそうした対人障害の初発して間もない中学から高校にかけての頃に、1対1関係の可能な集団セッティングが用意されるなら、彼らは自力で這い上がってくるかもしれない」

3. スタッフの感想と今後の課題

以上に述べた「グループ全体の展開過程」と「個人の内的展開過程」については、なおまださまざまな問題点についての討論がありうるであろうし、また以上の両者の「関連」についても詳細な検討が必要であろう。そのほかにも多くの残された課題があるが、ここでは少し角度を変えて、スタッフの「感想」の一部を掲げて、今後のさらなる検討のための資料とすることとしたい。本当ならば全スタッフのレポートを掲載したいところであるが、ここでは事例に深くかかわったふたりだけに限定しなくてはならない。まず麗子の「本年度の活動を終えての感想」からの抜粋である。

「面接を担当することは私にとって初めての経験であったが、池田先生、M先生のバック・アップによって大きな安心感が与えられた。また、私の面接の1回1回をスタッフの皆が真剣に考えてくれたことによって、私ひとりで背負い込むことなく、夕子やそのほかの人たちのことを、さまざまな切り口から見ることができた。ただ、ケース会議で夕子とのかかわることをスタッフに漏らすことと、自分だけが特別に勉強させてもらっていることに、一種の後ろめたさのようなものも感じていた。また、皆のいろいろな意見を聞くことで、私は大いに揺さぶられもした。しかし、それも結果的にはプラスの経験になったと今では思える。それは普通の大学生活では決して体験することのできない最良の機会であった。勉

強不足なため不安も多かったが、知らないことが多い分、変に理論づけたりせず、純粹に自分自身と向かい合うことができたのだと思う。

グループ・アプローチと個人面接の関係については、あらかじめ個人面接の位置づけをはっきりしておけば、とくに問題はないと思われる。ひとつ注意すべきと感じたのは、面接の中で話題としてほかのメンバーやスタッフのことがよく出るようになるが、とくにスタッフへの否定的な意見が出てきたときに、いかにそれに惑わされないようにするかということであった。また同じメンバーとグループ活動ではどうかかわり、個人面接ではどうかかわるかを初めから明確にしておく必要がある。秘密保持の問題など難しい面もあるが、いわゆる『あいまいさへの耐性』を持ち備える必要があると思った」

次にもうひとり、グループで夕子と深くかかわった卯月の感想を掲げておこう。彼女は昨年から参加しており、この2年間について対比的に語っている。

「ヨコ体験グループに参加して得た最大の収穫は、自分自身の変化であった。昨年は臨床をやりたいが、自信がなく不安ばかりで、合宿参加もためらい、1回1回緊張して恐る恐る、体当たりで臨んだ1年間であった。人と接することを真剣に考えることで、今まで目をそらして、きちんと認識しようとしなかった本当の自分が見えてきた。そんな私との出会いの中で、メンバーは見る見る変化していった。自分が変わることによって人間関係が変化するという、人と人との間の相互作用の不思議さを、理論や言葉としてでなく、経験として体得できたのが去年だった。

2年目の今年は、去年と違ってスタッフは選抜され、組織化されて、一定の決まりや形式の上に成り立つグループ活動になった。私も去年よりも高い目標と希望を持って参加したが、昨年の経験が通用せず、またメンバー

を集める前のスタッフ関係に馴染めなかったので、居場所のない、息苦しい思いが強かった。スタッフ間に信頼関係が持てるまでの間、会議はストレスフルで、自分を殺し、自分の弱さや恐怖心と戦う場であった。しかし、メンバーと一緒にいる定例会は、唯一、無気力さや逃げたい気持ちから救ってくれる時間となり、その良い刺激によって、私はだんだん自分のやるべきことがつかめるようになった。メンバーと同じ視点で考えることで、ヨコのつながりの意味や自分の居場所や役割を実感することができた。経験を通して理論を体得することのできた、メンバーと同じ成長のできた1年だった。去年が、本当の自分やあるがままの自分を素直に出すことを学んだ年であるなら、今年は、その自分を自覚したり、受容されたりした年であったと思う。

私がこのグループから教わった最大のものは、自分なりのやり方を信じてやり通すことの大切さと仲間の存在の重要性である。自分の言動のひとつひとつがメンバーにもスタッフにも何らかの意味を持ち、決して無駄なものはないのだということ、仲間がいることで自分が確認できること、メンバーのためということがそのまま自分自身のためになっているということ、そういうことを感じる事ができたのが、このヨコ体験グループだった。臨床経験としてこれ以上のものはない。

去年は池田先生からいろんなことを教えてもらい、先生の経験主義にのっとった学習に重点を置いた、外部の人とも合同の活動であったので、主体的に参加し、楽しみながら責任や義務を果たしていくことのできた自由な体制であった。しかし、その自由さゆえの苦しきや知識不足からくる不安が大きかったため、今年は組織化されて、規律に拘束された狭い体制になった。今後は、去年の自由さと主体的に学ぼうとする姿勢を持ち、グループの運営は今年のように一定の方針を持って進んでいけたらと思っている」

V. おわりに

本報告をまとめる上で、膨大な記録の整理、およびその分析にあたっては、次のスタッフの協力を得た。本報告は本来、これらの学生諸君（現4年生）との共同研究というべきものであることを付記しておきたい。

浅菜 知香、上田 和代、裏 美紀、
永井 香、横田 聖子

さいごに、本報告が今後参加するすべてのスタッフによって、いっそう詳細に検討され討議されるための資料として役立てられることにより、ヨコ体験グループが不登校生徒と学生スタッフの人的成長により寄与しうる活動となることを念願して、筆をおくことにしたい。

文 献

- 池田豊應 1993 臨床的教育・訓練の方法としてのグループ・アプローチ —登校拒否グループ活動へのスタッフ参加経験から— 名古屋大学教育学部（名古屋大学教育方法等改善経費研究報告書）
- 池田豊應 1995 成長へのかかわりの創造 梶田正巳編 成長へ的人間的かかわり —心理学・教育学のアプローチ— 第16章 有斐閣
- 池田豊應、山下 礼 1996 不登校生徒のためのグループ・アプローチ —第1報「94ヨコ体験グループ」のまとめ— 東海女子大学紀要 15、197-213
- 池田豊應(編) 1997 (3月刊行予定) 不登校の人間学 (予定) 大日本図書
- 笠原 嘉 1977 青年期 —精神病理学から— 中公新書
- 木戸幸聖 1982 コミュニケーションの基礎的問題 加藤正明ほか編 講座 家族精神医学 第1巻 家族精神医学の基礎理論 第5部第4章 弘文堂
- 小谷英文 1990 集団心理療法 小此木啓吾ほか編 臨床心理学大系 第7巻 心理療法1 第IX章 金子書房